



皿山の文学～ 江戸時代の俳諧



有田皿山の中心にある陶山神社には、明和九年(1772)、今から234年前の年号が刻まれた“雲折々人を休むる月見かな”という芭蕉句碑(月見塚)が残っています。佐賀県で最も古い芭蕉句碑です。建立の経緯はよくわかりませんが、有田では当時から俳諧が盛んであったことを裏付けるものといえます。

さらに、このほど中の原町にある八阪神社の拝殿で「奉納三千句之内撰揚奥巻頭」という題が墨書された木製の俳額が確認されました。

調査を行った田中道雄佐賀大学名誉教授によれば、幕末に大村の宗匠・川原悠々が花の本流という流派を精力的に広げ、この流派の作者の流れをくむ俳人が有田には数多くいたそうです。

拝殿に入ってすぐの壁際に奉納された俳額には、100句近くの俳句が墨書されています。当時、神社の新築だとか、何か大きな催事を契機とし、それを記念して選句料と共に投句を呼びかけたそうです。それに呼応して各地の愛好家が句を寄せ、その数「三千句」といいますから、たくさんの句が集まったものと思われます。その中から優れた句を選び出し、俳額に記されたものだろうということでした。残念ながら俳額に年号は見当たらず、何の目的であったかも不明です。しかし、田中先生によれば、おそらく川原悠々が没した安政三年(1856)11月27日から、俳額の中に名前のある京都の宗匠河村公成が没した明治元年(1868)6月6日までの間に成立したものと考えられるということでした。

縦60cm、横278cmという大きな俳額には最初に「軸」という表記がなされた最高位の句が掲げられていました。それは次の通りです。

宿引(き)の持(ち)たがりけりはなのえだ

大村の住人、月泉という号を持つ俳人が投句したものであると思いますが、この他に大村の28人、長崎の旧甫ほか3人、平戸の一橋ほか4人、波佐美(波佐見)の桃里ほか3人、早岐の古月ほか1人、川棚の杜月ほか1人、武雄の素泉などの名前が見えます。

俳額の中ほどに「秀逸」とある句は波佐美の草雨によるもので、次のような句です。

野も山もありのまゝなり今日の月

このほか、ミツノマタ(波佐見町の三股)、原明、外尾村、広瀬山、黒牟田山などの俳人の名前が1人ずつ見受けられます。中に地名がない句が22句あります。これは何を意味するのか、いろいろ検討した結果、それらには陶里、有谷、陶珂など有田皿山にちなんだと思われる号が見受けられ、また、同じく琴岳という号はこの当時活躍した大樽の絵描き職人・江副琴岳ではないかと推測されることから、有田内山の俳人たちではないかとも考えられます。

八阪神社境内にはこのほかに、明治29年に建立された「余力社」の句碑があります。大分磨耗が進み、解読が困難ですが、以前の調査では句を寄せた45人の名前が判明していて、山畝(久富与次兵衛昌保)、金ヶ江有山などが関わっていたことがわかっています。

また、拝殿の左奥には中野学園、和久栄之助、蒲地忠平、手塚嘉十、正司敬次などのメンバーがいた土曜会によって建立された句碑もあります。これらは余力社から好風会、さらに土曜会から有田素焼吟社へと、明治時代から昭和にかけて有田皿山で活躍した俳句結社の流れです。これを受け有田ホトトギス会としての活動が現在も続いています。



中の原にある八阪神社は祭神を武速素盞鳴命(たけはやすさのおのみこと)とし、江戸時代は祇園社と記されています。その縁起は文政11年(1828)の大火で焼失したといわれ、詳細は不明です。佐賀の俳諧や文学に関しては「佐賀の文学」(佐賀の文学編集委員会編集・新郷土刊行協会発行)に詳しい記載があります。



季刊 皿山 秋 No.71 2006

有田町歴史民俗資料館・館報

大阪毎日新聞に見る 昭和初期の有田窯業界 ～陶工に物を聴く夕～④

前号に引き続き、昭和10年8月6日付から10日付までの大阪毎日新聞に掲載された座談会を紹介いたします。なお、表現が文語体の部分もあり読みづらいかと思いますが、当時の息遣いを感じていただきたくあえて原文のままにしています。

古賀氏(元有田工業学校教諭)

私は有田焼のねらい所としては伝統的な有田焼特色の現代化—といった方面へ精進することだと思う。有田を離れて有田はない、あくまで有田の特色を生かすということに誰でも異議はないと考えます。この伝統色、いい換えれば地方色といったものの中に現代人の習性を加味して行くことだと思います。そしてわれわれ作家が製作に当って何が必要かといえば生活の糧としての刺激であると思う。この有田の山間で昔はなるほど支那文化を中心に各国の文明を長崎を経由して吸収した、その作ゆきといったものからその他一切のものまで、それぞれ多くの刺激を受けたでしょう。けれど今日の有田は殆ど刺激がない。これはどうぞ県当局その他で統制ある指導精神をもって業者を輔導することだと思う。私の友達がかつて私に現在の有田焼の行詰まったのを打開するには各地に商品紹介所とでもいうべき機関を設けて商品の販売斡旋をするばかりでなく、たえず変化する意匠の動き、趣味嗜好の動向を細大漏らさず通信させる、都会人の認識を深めるということをすればよいと語ったが、面白い見方だと思う。

江原氏(香蘭社美術品部)

いまの古賀さんのお言葉の刺激ということが現在吾々の持っている意見と同じことで、参考品のないことを訴えられた二宮氏の意見とも同じことだと考えます。

寺内氏(元有田工業学校校長)

松本君、何か焼物でこんな物を作ってみたいというような物はありませんか

松本(佩)氏(帝展入選作家)

本焼で赤色を出すことが出来たらと思いますが…。もっとも今から随分前に加藤友太郎^{※注}という人がこれに似たのを出しているようです。また三共から売り出している“朱赤釉”も面白いですが釉薬をかけると消え

るです。帯止など上絵に使えば素的(敵)な色でしょう。川浪氏(前香蘭社美術品画工部主任)

友太郎の赤はその部分だけカラ焼して後で赤だけ入れたのではないのでしょうか。

稲富氏(帯止作家)

帯止ばかり作っている私として殊にデパートを唯一捌け口としています関係上、急テンポの流行に副うて構図するには骨が折れます。現在四百種ばかりも作っていますので、新しい作品をとると実際困るので。先刻、二宮氏のいわれたように参考品の陳列場といったものがあれば実際いいと考えます。東京や大阪に行けぬ、また行っても十日や一月で田舎出の私達がそう思うように好いヒントをうけるのはむしろかしいことです。

二宮氏(帯止作家)

友禅模様の急激な流行に伴うて変化してゆくのですからなあ。

武藤氏(大阪毎日新聞佐賀支局長)

こちらに参りまして帯止をいろいろ拝見して感ずるのですが、今の模様と少しかけ離れて俳画風に、自然をそのまま取り入れた極く軽快なといった感じのものはどうでしょうか。

稲富氏

そこまではまだ行っておりません。そしてそんなものを作っても、それが理解出来るものは一部の趣味的な人々のみのもので一寸作り難いように考えられます。

二宮氏

あの派手な我々男ではとても気が引けて、よう着て歩きかねる模様を平気で着て歩く女の用いる帯止ですから(笑声)男の考えとは一寸変わっていますよ。和田さんが何時だったか、私の作った骸骨の帯止を見てこの歯は少しキザだから白色の方がよからうとおっしゃったが、さてこれを女に見せると金歯の方が売れるから面白い。

◆十人好きの品がよく売れる 帯止の意匠論議

稲富氏

私は自分が作った帯止をよく女の人に見て貰いますが、十人のうち七人まで好きだという物が矢張りよく売れる。

二宮氏

よく女に気を付けて歩くのですが…(笑声)女のあの派手な風に合わせるのは実際我々作家が困ることです。

加藤氏(帯止作家)

今日のような帯止の盛んな有様ではとてもジツとし

ていては良い品が作れません。作品は用いる人の心になって作る…これでしょう。自分の趣味ばかりではとても売れっこはありません。しかしそれに迎合して有田焼本来の味を脱したら大変なことだと考えています。一目見たら買わずにおれぬ、この心を起させることでしょう。一寸見てもよいよく見てもよいといったところでしょうなあ。

今泉氏(今泉陶園)

今の帯止はあまりに出来過ぎているようですね。

庄村氏

しかし、そうなければいかぬと思いますね。どちらかといえば高級品と安物と二つあっていいと思います。

二宮氏

近頃の帯止の製作一技術はとでも進んで来ました。マラソンで始終せかせかして一生懸命やっていますが、こんな努力を帯止以外の食器類や別の品物に払っていたらもっと進むでしょうけれど。

平林氏

さつきから、皆さんのお話を聴いて近ごろ愉快なことだと思う。それにしても工芸美術とはいいい條衣食住が伴はなければ永続はしない。工場採算のゆくようにして飽くまで有田焼の持つ特色を十二分に発揮することだと考える。技術でも品質についてもまだまだ研究の余地があるから現在の商品とともに輸出工芸品の復興をはかるという意味、精神を持って有田焼のため奮闘して貰いたいと思います。



各種の帯止 (館蔵)

◆帯止製作は有田焼の墮落

松本(佩)氏

極端の言葉かとも思うが帯止の製作は有田焼の墮落だと考える。如何にこれがため若い作家が研究心をそれに奪われたか、真の工芸品の発達が阻害されたかとかえ思われる。

川浪氏

絵という立場から有田焼の進む道は矢張り色鍋島柿右衛門風の当世風にしたものだと思う。それについては頗る苦しさがあるが研究すれば必ず出来ると思う。

和田さんの図案なども参考としてこれを有田の手法で生かすことも決して難事ではないと思います。

今泉氏

昔の色鍋島風の図案の中には時代を超越したよさがたぶんに盛られているのがあることはイツも感ずることではありますが、どうすれば意匠が改良されましようかね。

川浪氏

改良と行ってもそう簡単には行くまい。

松本(佩)氏

行き当りバツタリやることです。私が帝展へ出すについても、いつも、そういった考えでやって、在来の有田の手法の線とか濃(ダミ)とかでやったものを鉄筆で書くとか布絵でゆくとかその手法を苦心してゆくことでしょう。浴衣の衣装は藍一色で千変万化の意匠を盛っています。手あたり次第にやっていて自ら道が開けてくると考えます。

寺内氏

松本佩山氏は多年のご研究で色鍋島から脱却したところに、実にいいところがある。女の濃み手はズッと以前女子画工伝習所というものを作ってそこで稽古させたものだが今では昔のような上手なのが少なくなりましたね。近代ではおたみが一番でしたらう。

川浪氏

よい陶工を作る作らぬは結局製造家の腹でしょう。良い作家も下手な人も将来の生活に対するある程度の保障?がない限りは良い作家が出来ないということがごく自然なことだと考えます。

古賀氏

先刻、寺内先生の仰った画工伝習所時代の人々が近世までのよい濃み手でした。中でも日恵古場のおみしさんなんかは上手の部でした。それから轆轤ですが近ごろは殆ど全滅ですね。有田工業学校に別科がある時代に養成された人々がこの轆轤を専門的に習ったが、この別科出の人が今日までの有田の優秀轆轤工でした。それがいまでは殆ど欠乏してここにお出の百田さん位のものですからねえ。(次号へつづく)

《注》

※加藤友太郎……瀬戸の明治期の陶工。釉下彩磁器を中心とした芸術性の高い作品群を生産。明治31年に「陶寿紅」と呼ばれる独特の朱色顔料の開発に成功し、翌年のパリ万博で名誉大賞を授与された。

夏休みの資料館

18年度ミニ企画展「戦争と有田皿山」展

8月1日～8月31日の間、ミニ企画展として「戦争と有田皿山」展を開催しました。

昨年より稗古場の篠原充さんから、亡父高三氏に関する700点余の資料を寄贈して頂きました。その中の出征旗や戦場からの手紙など、戦争に関するものに加え、当時の有田の世相を示す写真など計70点余りを展示しました。

「歌人伍長」として当時の新聞で紹介された高三氏は、町内の学校の教諭を務め、昭和16年12月8日、南方のマレー半島にて戦死しています。

終戦の年に生まれた人が還暦を越えるほどの年月が過ぎましたが、資料に遺された思いは決して消えることはありません。検閲を経て戦地から届いた歌に込められた兵士の想い、また当時の役場日誌や写真による有田の情景に、来館の方々も自らの思いを馳せていたようです。



町屋模型作り教室

夏休みの恒例行事となった町屋模型作り教室を、8月17日、18日の2日間行いました。有田町内山地区は国の伝統的建造物群保存地区に選定されています。有田町の未来を担う子供たちに、その伝統を認識し、受け継いでほしい、という趣旨で始まった模型作り教室ですが、今年で7回目になります。

小学校5、6年生を対象にしており、今年から合併のため有田小学校、有田中部小学校に加えて、大山小学校、曲川小学校からも合わせて13名の参加がありました。

今回は昨年までの町並みを重視した模型とは一味違い、家のサイズを大きくして、内部の細かい所まで自

由に作ってもらいました。連続参加している人、初めての人、それぞれ斬新な発想で大人を圧倒させてくれました。

出来上がった作品は夏休みの自由研究として各学校へ提出されます。来年も開催する予定ですので、5、6年生のみなさんはぜひ参加してみてください。

《参加者》

有田小学校……鶴田美咲さん、馬場麻衣さん、本島沙希さん、有田中部小学校……横田尚丸君、豊増日菜さん、樋口尚朗君、堀江美紗さん、百武慶一君、岡本百華さん、大山小学校……藤裕人君、曲川小学校……長嶺将平君、田中晶子さん、田中俊太郎君
(計13名)



有田中学校2年生の職場体験

8月22日～24日の3日間、有田中学校2年生の下野良太君、田中永樹君、西田勇真君、山口将平君の4人が職場体験学習にやってきました。

1日目、2日目は出土した陶片資料の整理作業に取り組みました。陶片の実測、トレース、写真撮影をし、最後にこれらをパソコンで編集しました。3日目は襖の下張りの調査（古い家の障子や襖の下張りには、不要になった書付や帳簿などを使った場合があります）を行いました。これらは有田の歴史の一部で、貴重な古文書が出てくるかもしれません。

普段ではあまり接することのない仕事の数々に、生徒たちも興味津々の様子でした。

季刊『皿山』

通巻71号（平成18年9月1日）
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185